一宮市博物館だより

No.42　2008.3

丸井金猊　「壁畫に集ふ」1938年　屏風　四曲一隻

平成20年度 特別展

いまあざやかに 丸井金猊展

4月26日(土)～6月1日(日)

休館日： 4月28日(月)・30日(水)・5月7日(水)・12日(月)・19日(月)・26日(月)

観覧料： 一般500(400)円／高・大生300(240)円／小・中生200(160)円

※( )内は20名以上の団体料金

※一宮市内の小・中学生は無料

※一宮市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示の方は無料

※身体障害者等の手帳を持参(付添人1人を含む)の方は無料

芥子花圖

講演会《聴講無料》

日　時： 5月4日(日)　午後2時から　　**会　場：** 妙興寺公民館

定　員： 100名(先着順)　　**演　題：**「美術の遺伝子」

講　師： 山本陽子氏(明星大学准教授)・丸井隆人氏(Webデザイナー・大阪大学非常勤講師)

ギャラリートーク (学芸員による展示解説)

日　時： 5月10日(土)・18日(日)

いずれも午後2時から展示室にて

鷺圖

観音前の婚姻圖

丸井金猊(1909～79)は、明治42年10月19日に愛知県葉栗郡北方村大字中島(現・一宮市北方町)で、丸井貝二とみわ夫妻の9人兄弟姉妹の3男として生まれました。昭和3年(1928)、愛知県立工業学校の図案科に学んだ後、同年4月東京美術学校(現・東京藝術大学)日本画科に進みます。当時の美術学校にいた郷里の先輩である川合玉堂にあこがれ進学したとも言われています。入学時から熱心に学び、当時描いた写生画にも見るべきものがあります。在学中に、古今東西が融合した独特の画風を生みだしました。昭和5年(1930)には国際美術協会主催第1回美術展覧会で入賞首席を獲得。「菊」を描いたこの作品は買い上げとなり、卒業制作作品も当時の外務省政務次官であった明治村(現・稲沢市)出身の瀧正雄氏が買い上げるなど在学中から賞賛され、評価されました。昭和10年(1935)東京・愛国生命保険(のち日本生命保険)壁画「奏楽」制作、同12年(1937)小林一三氏の委嘱により株式会社東宝劇場階段ホール壁画「薫風」(後に火災により焼失)の制作など華々しい活躍をしました。

しかし、昭和13年以降は大作を制作することはなく、女学校の教諭などを勤め、生計を立てます。戦争以後は昭和22年(1947)東京美術学校図案科講師を勤めますが、昭和23年(1948)からは神奈川県立神奈川工業高校工芸図案科の教諭として、全国ではじめて工芸図案科を産業デザイン科と改めるなど美術教育者として熱心に後進の指導にあたりました。古くから伝わるものを丁寧に学ばせ、そこから新しいデザインを創造させ続けていきます。

昭和46年(1971)の神奈川工業高校定年退職後、新たな創作意欲のもと制作をはじめますが、昭和54年(1979)に69歳で亡くなりました。

今回、地元ではほとんど知られてこなかった一宮市出身の日本画家丸井金猊の独特の美意識のもとで生み出された作品をはじめて展示します。和洋の素材を研究し、創り上げた独自の世界をぜひお楽しみください。

(伊藤和彦)

浴女

深鉢　日本
縄文時代中期（紀元前2千年代）
愛知県陶磁資料館蔵
（工藤吉郎氏寄贈）

土と炎の芸術
～世界の土器～

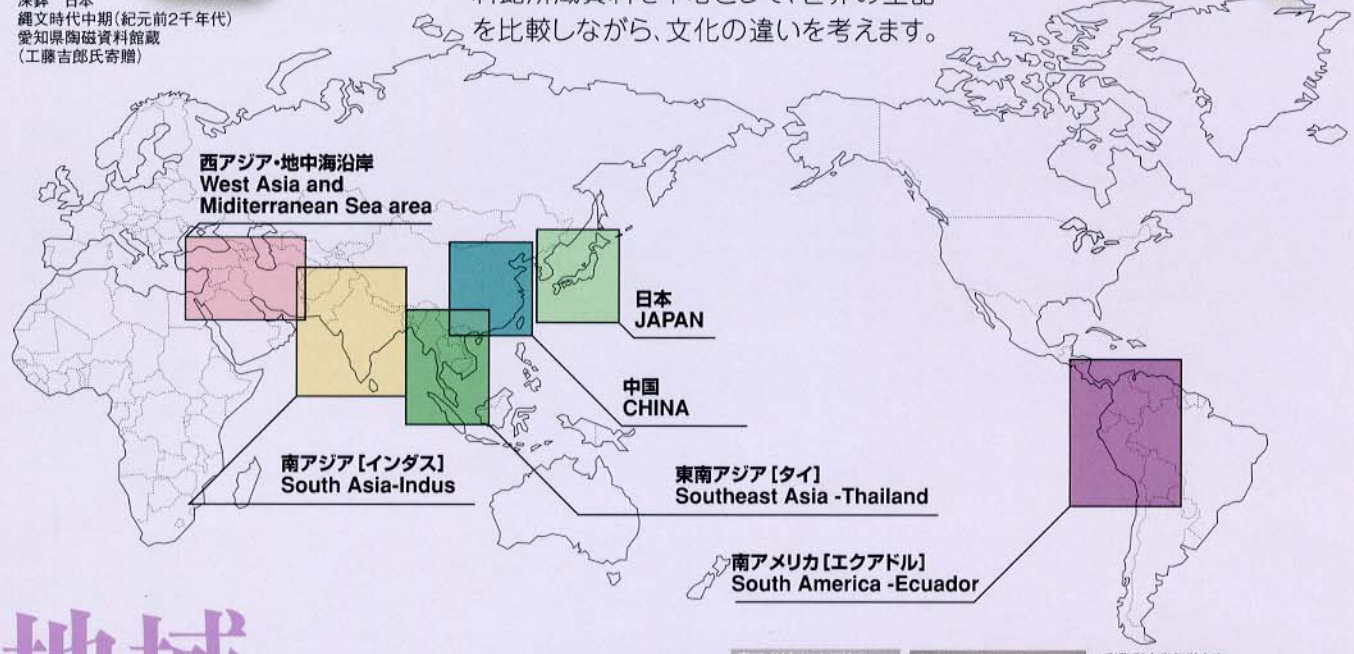
2008.7.5（土）～8.3（日）

わたしたちの暮らしの中で、さまざまな場面で使われている焼きもの。しかし、割れないプラスチック製品が低価格で普及し始めると、需要が以前に比べて少なくなったと言えます。

この展示では、現在の焼きものの初源である土器に焦点を当て、愛知県陶磁資料館所蔵資料を中心として、世界の土器を比較しながら、文化の違いを考えます。

土偶　日本
縄文時代晩期（紀元前10-前5世紀）
愛知県陶磁資料館蔵

地母神像　シリア
鉄器時代（紀元前1千年紀）
愛知県陶磁資料館蔵
（鈴木青々氏コレクション）



地域

今回展示される土器のふるさとは、日本・中国・東南アジア（タイ）、南アジア（インダス）、西アジア・地中海沿岸・南アメリカ（エクアドル）です。

それぞれ形や文様の異なる特徴的な土器ですが、その発生した理由も違います。日本の土器は、煮炊きをするために発達しました。中国では、日本の縄文人が野焼きで土器を焼いていた頃に、簡単な窯で赤に発色させた土器を焼いたり、マンガンや鉄の顔料で文様を描いたりしていました。南アジアのインダスでは、紀元前7000年頃に麦の栽培が始まり、そのあとで土器が作られるようになったと言います。西アジアでも同様で、土器作りより農耕が先に始まります。これは、食生活のスタイルにも関係があり、パンとして穀物を食べるために、土器に求められる機能が貯蔵や運搬だからです。

土器の発生だけ見ても、世界は多様な文化で成り立っていることがわかります。

彩陶双耳壺　新石器時代（紀元前3500～2500年）
愛知県陶磁資料館蔵

彩文機何学文台付鉢　銅石併用時代（紀元前4500～4000年）
愛知県陶磁資料館蔵

1 彩陶彩文幾何学文壺
統合期（500～1534年）
愛知県陶磁資料館蔵
（鈴木青々氏コレクション）

2 黒陶突帯刻文高杯
青銅器時代（紀元前1千年紀）
愛知県陶磁資料館蔵

時代

今回展示されている土器は、今から10000年ぐらい前から1700年前ぐらいまでの期間に作られた土器を中心としています。日本ではドングリやトチの実を主食にしていた縄文時代から、稲作が普及する弥生時代にいたる期間です。青銅器や鉄器が使えるようになる時期は、地域によって異なります。土器も発生する時期が異なり、もっとも早くから土器文化を発達させたのは、日本と中国です。以後、日本では、古墳時代中期（5世紀）に窯を使った須恵器の生産が始まり、現在の陶器の起源となりました。2次焼成、すなわち煮炊きに強い土器と、硬質で吸水性の低い陶器は、その性質を活かして器種が選定され、生産されました。

大量生産されるようになった現代の陶器や磁器とは異なり、土器には作った人々の暮らしに根ざした思いや、自然を畏敬する芸術性の高さがあふれています。この展示では、機能性だけではない土器の美しさも感じることができます。　（久保禎子）

歴史探訪

「凶荒図録」と「穀物の女種をまきつけ取實おほきすゝめ書」

現在、日本は飽食の時代といわれ、飢饉によって人々の命が奪われることはほとんどありません。しかし一方では、世界のあちらこちらで食糧不足のために命を落とす人々がいます。つい数十年前までは、日本においても食物がなく、空腹に苦しんだ時代がありました。

江戸時代にも飢饉が繰り返し起こり、特に享保・天明・天保期には全国的なものとなり、江戸三大飢饉と言われています。

今回の歴史探訪では、江戸時代の人々が飢饉をどのようにとらえ、またどのような対策を行っていたのか、その一端を博物館に所蔵される「凶荒図録」と「穀物の女種をまきつけ取實おほきすゝめ書」を通して垣間見ます。

「凶荒図録」にみる飢饉

「名古屋藩施行の図」(「凶荒図録」より)

江戸時代の人々は、飢饉は数十年に一度、忘れた頃に襲ってくると考えていたようです。飢饉を経験したことのない者にその恐ろしさを伝えるため、甚大な被害の出た天明の飢饉を契機にして、多くの救荒書が出版されるようになりました。

「凶荒図録」は、明治一八年(一八八五)に刊行された表紙とも三三丁、縦二二・八cm、横一五・二cmの書籍です。本書は、小田切春江が江戸時代に出版された多くの書籍を編集し、木村金秋の挿絵をまじえて、飢饉の悲惨さを記しています。

その中の一つ、「名古屋藩施行の図」は、「天保七申年ハ甚しき凶歳にて翌酉年の春ハ下民の困窮いふばかりなく何れの市街村落にも餓死行斃(ゆきだお)れのあらざるハなかりけり」と、天保期の尾張藩における飢饉が農村部、都市部関係なく襲いかかり、まさに飢餓地獄のような状況であった事を記しています。

こうした状況に際して、尾張藩は「此時に当りて官よりハ名古屋廣小路に施行小屋を設け粥を焚き出し或ひハ米を施されたり」と、救済活動を行いました。さらに公的な配給で不十分な場合には、「又市中の慈善家ハ夫々申合ひ金を集めて桜の町天神社の境内に於て銭を施し窮民を救ひたり」と、民間の有志による救済活動も行われました。

江戸時代、名古屋のような都市部では、商品流通の発展により食物を生産することはなく、生産地である農村部からの供給によって食物を購入する消費生活が送られていました。こうした状況の中、生産地が凶作になると、その影響は避けがたいものとなり、特に主食である米の値段の高騰は、深刻なものでした。そして、その直撃を受けたのが貧しい層の人々で、最悪の場合、そうした層から餓死していくのでした。

「穀物の女種をまきつけ取實おほきすゝめ書」

「穀物の女種をまきつけ取實おほきすゝめ書」

飢饉に襲われていた天保八年(一八三七)八月、尾張藩は、「穀物取実多キ進メ書、御勘定所より相渡候付、村々おいて壱枚宛取之候様可致候、此旨承知之上進メ書相添早々先村え可相廻候、以上」(『新編一宮市史資料編八』二五九九)と、各村々に「穀物取実多キ進メ書」なる書を配布しました。これが、「穀物の女種をまきつけ取實おほきすゝめ書」(萩原町加藤家寄贈文書、以下、「すゝめ書」と記す)と考えられます。

「すゝめ書」は、天保八年七月に上梓された縦二四・五cm、横三四・四cmの一紙物です。この書では、稲・麦・粟・稗・黍・豆・綿・菜・大根・芋の雌雄の分類図を掲載し、「陰種(めだね)をえらびて蒔時ハ稲ハ田壱反ニて弐斗より三斗程も余計とりミあり」、「凶年ハ其わり(あきとし)ニ多くとれる也」と、女種を播種した際の利点が記されています。

江戸時代には植物に雌雄があり、それを見分けて雌種を選んで播種すれば、収穫が増加すると信じられていたようです。こうした視点で書かれた農書は多く出版され、特に文政一一年(一八二八)に出版された「農業余話」は、大好評の書物となり、広くこの思想が浸透しました。

こうした草木雌雄説にもとづく女種播種による収量増加は、もちろん科学的論拠によるものではありません。しかし、当時の人々は、収量増加と凶作に備えるためにこうした書物を参考にして、農業に従事していました。また、支配者層もこうした書物を活用して農政指導を行い、飢饉への備えや収量を安定的に獲得できるようにしていました。

現在の日本の食料自給率

現在(平成一八年度)の日本の食料自給率は三九%(カロリー換算)といわれています。詳しく見ると、主食用の米の自給率は一〇〇%であるものの、小麦は一三%、飼料用を含む穀物全体の自給率は、二七%です。また、果実は三九%、肉類は五五%であり、いずれも高い数値とはいえません。日本では、これらを補うためアメリカやオーストラリア、中国などから食物を輸入しています。

こうした現状は、江戸時代の都市部が農村部からの食物供給に依存していたことと類似しているように思います。海外の食物を多く輸入する現代の日本を鑑みると、飢饉に襲われた日本の歴史は多くの事を示唆してくれているような気がします。

参考文献

『図譜江戸時代の技術上』(菊地俊彦編、一九八八年、恒和出版)

『企画展飢饉食糧危機をのりこえる』(名古屋市博物館編、一九九九年)

『食品不安　安全と安心の境界』(橋本直樹、二〇〇七年、日本放送出版協会)

農林水産省HP/食料自給率の部屋(http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/index.html)

(附記)　貴重な史料をご寄贈いただきましたことにここで改めてお礼を申し上げます。

(坪内淳仁)

平成一九年度後半分の 博物館活動

特別展 没後五〇年 川合玉堂名品展

H19・10・20～11・18

近代日本画の巨匠・川合玉堂（一八七三―一九五七）には「ふるさと」が五ヶ所あります。生誕の地である現在の一宮市木曽川町外割田。八歳の時に転居して思春期を過ごした岐阜。プロの画家を目指して日本画の修行に打ち込んだ京都。日本画家として確固たる地位を築き社会的地位と名声を得た東京。そして、太平洋戦争が激しくなった頃に疎開し、終焉の地となった奥多摩の御岳（みたけ）。

玉堂の作品には、かつては日本のどこにでも見られた美しい風景とそこでつつましく暮らす人々がよく描かれています。観る人全てが心温まり懐かしく思える風景、それは私たちの「心のふるさと」ともいえます。この展覧会は、玉堂の残した名品の数々を鑑賞することで私達のそれぞれのふるさとが繋がり合えることを期待し、玉堂没後五〇年を記念して開催したものです。初期から晩年までの作品が展示された会場は連日多くの方で賑わい、一〇月二八日には妙興寺客殿で玉堂美術館館長小澤恒夫氏と美術商安河内眞美氏の美術対談が行われ二四八名の参加者がありました。

また、生誕地に建つ一宮市立玉堂記念木曽川図書館では、特別展に合わせて一〇月二〇日から一一月一五日まで「新収蔵作品展―玉堂のふるさとでみる玉堂」を開催しました。そこには博物館で知って足を伸ばされた方も多く、玉堂記念展示室を知っていただく大変良い機会となりました。博物館では八〇三〇名、木曽川図書館では三五〇三名の方にご観覧いただきました。

玉堂名品展

木曽川図書館第7回玉堂展

玉堂名品展美術対談

市民文化財めぐり

H19・11・2

市民の方々に、私たちの貴重な財産である文化財を紹介して、文化財愛護の精神を高めていただくため、昭和四二年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催しています。四三回目の今回は、冨田一里塚～木曽川堤（サクラ）～浅井古墳群【桃塚古墳、毛無塚古墳、岩塚古墳】～長誓寺～禅林寺～妙興寺【境内地、勅使門等】～博物館（特別展「没後五〇年 川合玉堂名品展」）のコースで市内をまわりました。三一名の参加者の方々は、講師の解説を熱心に聞き入っていました。

文化財めぐり

企画展 二〇〇七一宮市現代作家美術秀選展

H19・12・1～16

「二〇〇七一宮市現代作家美術秀選展」は、第六五回一宮市美術展での依頼出品者の選りすぐり作品や市長賞受賞者の作品、及び一宮美術作家協会、一宮書道協会、一宮写真協会の各推薦者の作品八一点を展示したものです。会場は、昨年同様、特別展示室・ラウンジ・講座室・展示室4・ギャラリーで、やわらかな光と鮮やかな彩りを放つ紅葉を取り入れた落ち着いた雰囲気の中で多くの来館者の方々に鑑賞していただきました。

2007美術秀選展

企画展 くらしの道具 ～今と昔～

H20・1・5～2・24

本展覧会は、平成三年度より毎年歴史を学び始める小学校三年生を対象に企画し、今回で一六回目となる展示です。現在の主な対象は、小学校四年生です。展示構成は、衣・食・住の資料を中心とした民俗資料展示を主軸としています。さらに、木曽川上流山間部、知多半島・渥美半島海浜部の、自然環境が異なる地域の資料と比較することにより、地域による生活道具や暮らしの違いについても紹介しました。

●関連行事

一月六日(日)……「平野の道具を使ってみよう！～綿繰ロクロと糸車編」

一月一三日(日)……「ムギワラでネジリカゴをつくろう！」

一月二〇日(日)……「海のくらしを体験！」

一月二七日(日)……「山のくらしを体験！」

二月三日(日)……「平野の道具を使ってみよう！～農具編」

二月一〇日(日)……「昔の遊びを体験しよう！」

二月一七日(日)……「ワラで刀を作ろう！」

二月二四日(日)……「平野の道具を使ってみよう！～食の道具編」

「ムギワラでネジリカゴをつくろう！」…Museum Kids Club員が講師になりました。

「海のくらしを体験！」…日間賀島の漁師さんから、漁具の使い方を学びました。

文化財防火訓練・防火パトロール

H20・1・17
1・24

昭和二四年一月二六日に法隆寺金堂壁画が焼失しました。以来この日を「文化財防火デー」と定め、防災意識高揚のために各種行事を開催し、今年は五四回目に当たります。市教育委員会では消防本部とともに一月一七日に文化財防火パトロール、二四日に防火訓練・文化財管理者研修会を実施しました。防火訓練は堤治神社境内(小信中島)において市消防署員・地元消防団員・堤治神社の方々が中心となって行なわれ、地元町内会・保育園児など多くの参加がありました。

防火訓練

防火パトロール

博物館講座 尾張平野を語る12

H20・2・3ほか

これまで、本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招き、濃尾平野―特に尾張平野について考えてきました。

一二回目となる今回は、愛知県陶磁資料館のご協力を得て、焼き物を通史的にとらえ、尾張の伝統文化に与えた影響やその歴史的特徴について考えました。さらには、講座内容に関わる愛知県陶磁資料館所蔵資料を展示室4において展示しました。

展示室の風景

講座③の様子

●内　容

①平成二〇年二月三日(日)／参加者七四人
「日本人とやきもの」　学芸部長　仲野泰裕氏

②平成二〇年二月一〇日(日)／参加者六七人
「古代の焼き物」　学芸員　小川裕紀氏

③平成二〇年二月一七日(日)／参加者五四人
「中世陶器の生産と流通」　学芸課長　井上喜久男氏

④平成二〇年二月二四日(日)／参加者五八人
「尾張の茶の湯～鈍太郎の来名」　主任学芸員　神崎かず子氏

⑤平成二〇年三月二日(日)／参加者一二人
○「近現代の焼き物」　学芸員　佐藤一信氏
○「焼き物の科学」　学芸員　田村哲氏
○作陶の実習(陶芸館)

※講師はすべて愛知県陶磁資料館学芸員です。

作品展 手つむぎ・染め・織り展

H20・3・2～16

繊維講座生と伝承会員による、第一九回作品発表会。本年度に製作した、反物・着物など約四〇点の作品を展示しました。ご観覧の方には、機織りや糸づくりの体験をしていただきました。

博物館 民俗芸能公演

H20・3・23

一宮市博物館では、これまで市内に残る民俗芸能を広く市民に知っていただくために、毎年市内に残る民俗芸能の公演を行なってきました。

今年度は先年に引き続き、市指定無形文化財「島文楽」(昭和三六年三月二七日指定)と「宮後住吉踊」(平成一二年六月一二日指定)の公演を行ないました。

●内　容

◆島文楽　演目　「壺坂霊験記　山の段」(参加者八一人)

◆宮後住吉踊　演目　手踊(五十三次・音頭・すがわき・豊年・かっぽれ・深川)(参加者六八人)

島文楽「壺坂霊験記」

宮後住吉踊「手踊」

平成20年度催し物のご案内

平成20年8月30日(土)～9月15日(月・祝)

「2008一宮美術作家新展」

一宮美術作家協会会員による最新の発想でイメージの試作を展開した力作(絵画・彫塑・デザイン・工芸)を展示します。

平成20年9月18日(木)～9月28日(日)

「一宮写真協会展」

一宮写真協会会員の感性に裏打ちされた表現力で、熱い思いを込めた作品を展示します。

平成20年10月11日(土)～11月24日(月・祝)

企画展「一宮三八市のにぎわい」

かつて真清田神社の門前で行われていた「三八市」は、江戸時代から綿業関係品や生活必需品などの集散場所として大変賑わっていました。そこで本展では、「市」に集まった品々の流通や生産などの歴史を紹介するとともに「三八市」以外のその他の「市」も含めて展示します。

平成20年10月18日(土)～11月16日(日)

一宮市立玉堂記念木曽川図書館で開催

特別展「第8回　川合玉堂展」

現在、玉堂記念木曽川図書館が建つ場所は、近代日本画の巨匠川合玉堂(1873-1957)の生誕地です。その図書館の展示室を会場として日本の自然を詩情豊かに描いた作品を展示します。

平成20年12月6日(土)～12月21日(日)

企画展「2008一宮市現代作家美術秀選展」

第66回一宮市美術展の成果等を受けて、一宮市美術展依頼出品者・市長賞受賞者、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者の選りすぐりの作品を展示します。

平成21年1月10日(土)～3月1日(日)

企画展「くらしの道具～今と昔～」

衣・食・住を中心として、一宮市域の民俗資料を中心に展示を構成します。さらに、木曽川上流山間部、知多半島・渥美半島海浜部の、自然環境が異なる地域の資料と比較することにより、地域による生活道具や暮らしの違いについても紹介します。

講 座 の ご 案 内

平成20年5月～平成21年2月

古文書講座

本講座は、当館で保管している江戸期一宮の古文書をテキストとして使用し、古文書の読解力を養うと共に、その歴史的背景を学ぶ目的で開催しています。5月から2月までほぼ毎月1回、合計10回の講座を開き、3年で修了としています。

平成20年5月～平成20年10月

文化財解説ボランティア養成講座

博物館では、住んでいる地域の文化財を案内できるような方や文化財に関心のある方などを対象に、文化財全般についての知識・理解を深めて、ボランティアで史跡案内等ができるような人材育成をめざしています。

平成21年2月15日～3月15日の毎日曜日

尾張平野を語る13

本講座では、歴史のみならず自然環境や民俗文化など、幅広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野、特に尾張平野について考えてきました。

今回は、江戸時代の尾張西部と木曽川にスポットをあて、尾張藩の成立、政治、制度、産業等について考えてみます。

一宮市博物館だより

第42号

発行日　平成20年3月31日
編集・発行　一宮市博物館
制作　ヨツハシ株式会社

利用案内

【観 覧 料】(常設展・聴講料含む、特別展の場合は別途定める)
一　般＝200円(160円)　高・大生＝100円(80円)
小・中生＝50円(40円)　※(　)は20名以上の団体料金

【休 館 日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始(12/28～1/4)

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
※市内の小・中学生は無料
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

【HP】http://www.icm-jp.com/

一宮市博物館
〒491-0922　一宮市大和町妙興寺2390
TEL 0586-46-3215　FAX 0586-46-3216
[交通] 名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口徒歩7分

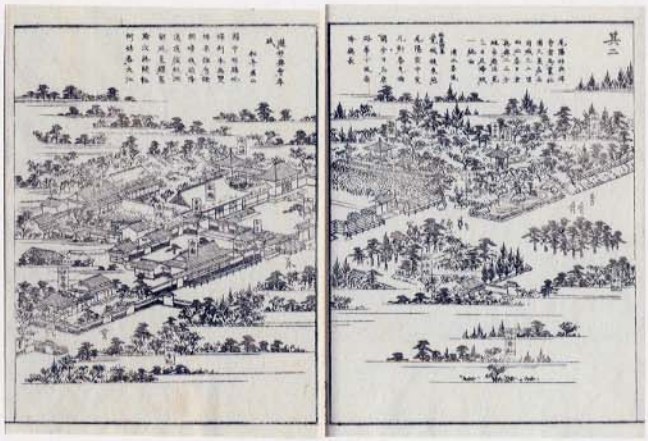
文化財保護事業

妙興寺「開山堂」「禅堂」（一宮市指定文化財）

平成一九年の秋に、寺にとって大きな行事である大応国師没後七〇〇年・南化国師没後四〇〇年の大法会が営まれました。大法会に先立ち、諸堂の保存修復が実施され、主なものは、平成一二・一三年度に「仏殿」（市指定）を、一五・一六年度に「山門」（市指定）のそれぞれが行われ、いずれも市補助金交付事業です。

平成一八・一九年度にかけては市補助金の交付を受けて、「開山堂」「禅堂」の保存修理が行われました。施工は株式会社竹中工務店です。

明治一三年（一八八〇）刊『尾張名所図会』後編巻一の「妙興寺」図より江戸時代後期の境内を見てみると、客殿東側の現在とほぼ同じ位置に、開山塔と記されている前堂と後堂の構造を持つ瓦葺の建物が描かれ、前堂と後堂は屋根付きの廊下で繋がれています。しかし、寺は明治二三年に大火災を生じて堂宇の大半を焼失し、開山塔も焼亡します。再建の際に、前堂の規模を拡大して禅堂を兼ねさせて、それに祀堂（開山堂）を接続する構造となりました。禅堂は大正七年（一九一八）、開山堂は同一四年の再建になります。



尾張名所図会

修復前調査によると、開山堂、禅堂とも屋根瓦の劣化が進み、瓦のズレ・割れ等が生じて堂内への漏水があり、化粧裏板等の破損・葺土の露出等が認められました。禅堂については、土台及び床（外部の土間床を含む）の沈下が発生し、柱の傾きや歪み、建具の建て付け不良等が各所に起きていました。土台まわりの沈下は、蟻害並びに床下の湿気や床面の結露等に伴う土台の腐朽によるものです。方針としては建物全体を土台から持ち上げて、腐蝕部分や損傷部分の取り替え、地盤改良・湿気対策等を行い、建物自体の建て起しを施工することになりました。また、地震に備え補強工事も合わせて施工することも決まりました。

建物の揚前工事は、柱脚部分にU型ボルトを使用して補強し、H鋼材を通材として油圧ジャッキにて持ち上げました。揚前工事の前には、腰壁や必要部分の壁を解体しました。その部分は揚前定着後に、小舞を架け直して貫を補強し土壁を復元しました。なお、壁は漆喰の上塗りを取り除き、全面新しく塗り替えました。

ジャッキアップ
写真提供：(株)竹中工務店

基礎工事の施工内容は、基礎である地覆石が沈下し、平坦でなくなっていたため全面的に敷き直しし、基礎コンクリート打ちを行いました。土台については腐蝕していたため、取り替えました。また、床面の湿気対策で防湿シート施工、土間コンクリート下地としました。禅堂の床は禅宗様である敷瓦四半敷仕上げ（平たい瓦素材による正方形の陶板を壁に対して斜め四五度になるように敷いたもの）としました。開山堂の床は解体をし、土台の全面取替え及び、柱の腐朽部分を除いて新材を継ぎ足す根継ぎを行い、床板を張り替えました。このような木工事部分には、見え隠れ部分に防蟻、防腐処理を行なっています。

屋根工事などは、屋根葺きの下地板である野地板や垂木等は健全な部分を残して取り替えました。割板（こけら板、トントン）は杉の新材に取替えをし、新瓦に全面葺き替えをしました。傷んでいた樋は銅製に取替え、竪樋の一部新設と雨樋受け、排水設備の設置などを行いました。また屋根の小屋組に補強をし、天井板の傷んだ部分を張り替えました。

修理後の禅堂外観

修理後の開山堂外観

構造補強施工の耐力壁は、文化財としての配慮や美観を考慮して、禅堂の北面に設置しました。耐力壁の表面は漆喰仕上げで、他の壁と同一意匠です。

外部の犬走りはモルタル仕上げ四半目地切りを施し、葛石（上端部の縁石を兼ねる長方形の石）を新設しました。

明源寺のハナノキ（市指定文化財）の指定解除

「明源寺のハナノキ」（東加賀野井）は昭和四一年に旧尾西市の文化財に指定され、平成一七年の合併により一宮市指定文化財となりました。

この木は、かつては胸高囲約三m、樹高約一〇mの堂々たる大木でした。往時には、春は紅色の花を咲かせ秋には鮮やかに紅葉するなどし四季折々の美しい姿を見せて人々の目を楽しませていました。

寺伝では、滋賀県愛知郡東押立村南花沢（現東近江市）の国指定天然記念物の雄樹の萌芽枝を移植したものといいます。代々枝を伐ることを禁じるなどして大切にしてきましたが、樹齢によるものか一〇年程前から枯れ始め、五年以上前に花を咲かせたのが最後といいます。枯れた部分を削ったり、サルノコシカケを除去したり、支柱を立てるなどの手当てをしたり、さらに樹木医による治療・処置を行いましたが、その甲斐もなく近年遂に枯死をしてしまいました。

現在、枯れた樹幹にサルノコシカケやノキシノブ等が着いている状態であり、止むを得ず平成二〇年一月二四日付けで指定解除になりました。

枯死前のハナノキ

枯死しサルノコシカケ類が着いている

参考文献
『妙興寺禅堂及び開山堂修復工事報告書』
一宮市教育委員会『一宮の文化財めぐり　増補改訂版』一九九九
一宮市博物館編『一宮市博物館研究紀要1』一九九〇
尾西市教育委員会『尾西市の文化財』一九九一